# 心の貧しい人たちは、幸いである。
# 天国は彼らのものである。

（新約聖書・マタイによる福音書５章３節）

　ふつう私たちが幸福ということを考える時、一番先に何を考えるだろう。

　金、地位、健康、容貌などが、一番先に心に浮かぶのではないだろうか。

　考えてみると、なんと移ろいやすいものに幸福を覚える存在であろう。

　金、それは極めて失われやすいものである。しかも、金は私たちを現実に幸せにしているとは限らない。金を持ってから、夫の素行が定まらず、その妻が泣いて暮らしている現実がどれほど多いことか。

　「夫と一緒に苦労していた昔が懐かしい」と嘆く女性を、私は幾人も知っている。金のために夫婦の間がこじれて、息子や娘たちの生活も乱れた例も見ている。その中には反抗的になった息子がナナハンのバイクを暴走させて、人をはね、自分も死んでいった例もある。

　地位もまた人間に真の平安を与えるものではない。いつ、その座を失うか、いつ、その席を奪われるか、戦々恐々としているのが、高い地位を持つ者の姿ではないか。その座を守ろうとして、みにくい争いが間断なく繰り広げられることは、毎日の新聞での政治家たちの姿を見ただけでも明らかである。

健康もまた移ろいやすいものだ。人間の体は病気の器だといわれている。

健康を幸いとしてこれに頼んでいる人は、やがてそれを失った時、甚だしい悲しみに突き落とされるのである。今までに、ずいぶん多くの病気の人を見舞ったが、ついこの間まで元気だった人が、病床で涙を流しているのを、幾度私たちは見たことだろう。

どんなに財力があろうと地位があろうと、いったん病気になった時は、そのほとんどの人が、見る影もなく心弱るものなのである。私たち夫婦も大病を経験しているので、その弱さがよくわかる。

私たちは人から幸福の秘訣を問われた時、このイエスのような言葉をもって答えたことがあろうか。

「心の貧しい人たちは幸いですよ」とか、

「悲しんでいる人たちは幸いですよ」

などと言うことができるだろうか。私たちには到底考えつかなかった幸福観を、イエスは堂々と、迫力ある、真剣な言葉で宣言されたのである。ここに世界の幸福観は逆転したのである。

ところで、このいかなるものが幸福であるかを説く第一に〈心の貧しい人たち〉としたのは、実に意味深いことだと私は思う。

心の貧しい人とは、人に誇るべき何ものも持っていない人であろう。金もない、地位もない、体も弱い、知識もない、おのれにたのむ何もないがゆえ に、ひたすら謙遜に、神の前に頭を垂れている人たちである。

イエスのまなざしは、いつもこうした弱い人々に向けられていた。イエスの愛は、いつもこうした謙遜な人間たちに注がれていた。

イエスの一番嫌いなのは、自分を正しいと思っている人間たちであった。心の中で、いつも、

（自分も大したものだ。学はある。金はある。そして、人に尊敬されている）

と数え上げては誇っている人間たちである。

イエスは誇ることのできない人たちには、限りなく愛を注ぐが、誇りたかぶる人間には、容赦のないきびしさを持って迫った。

考えてみると、私たちは神の前に立った時、本当に誇るべきものを、どれだけ持っているのだろう。天国（神の支配する世界）に入れてもらうために、私たちは一体どんなものを携えることができるのだろう。

金袋は、天国では一文の価もない。地位があるからといって、先に天国の門を通してもらうわけにはいかない。神の前に通用するのは、ただ、「心が貧しい」というだけなのである。「私には誇れる何ものをも持っていません」という、謙遜だけなのである。

たとえ、何ほどかの親切や善行をしたことがあったとしても、それは神の前に、なんの手柄ともならない。そのいささかの善行や、いささかの親切を誇ることがすなわち高ぶりなのだから。しかも私たちは、そのささやかな親切や善行の、何千何万倍の罪を日々重ねているはずなのだ。

人間は所詮、神の目から見れば、「罪を犯さずには生きていけない」存在にすぎない。その私たちが、神の前に一番先になすべきことは、

「神よ、私は罪深い者です」 という謙遜な思いを持つことであろう。それは簡単に見えて、決して容易ではない。どうしても自分が、それほど悪い人間には思えないのだ。

しかし、もし、私たちが生まれてからこの方、知り合った人々すべてに、忌憚のない自分への批判を聞くとするならば、そこには思いがけないほど多くの、自分への悪口雑言があるのではないか。すべての人の批判に耐え得る者は一人もないのだ。

まことに、心の貧しい者に、イエスは言われたのだ。「天国は彼らのものである」と。このイエスの言われた幸福こそ、決して移ろうことなく、奪われることのない幸福なのである。

（三浦綾子・新約聖書入門より）